

氏 名	おおつきえいこ 大 月 栄 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 437 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	偽ディオニュシオス・アレオパギテースのヒエラルキア論

論文調査委員 (主 査) 教 授 片 柳 榮 一 教 授 川 添 信 介 准教授 芦 名 定 道

論 文 内 容 の 要 旨

序

偽ディオニュシオスの『天上位階論』、『教会位階論』の両ヒエラルキア論を中心に、適宜他のテキストも援用しながら、神の隠れと現れ、類似・非類似の問題に焦点を当てて、偽ディオニュシオスにおけるヒエラルキアの意義を明らかにしていく。

第1部 ヒエラルキアとは何か

第1部では偽ディオニュシオスにおける「ヒエラルキア」の概念を把握する。

第1章 偽ディオニュシオスにおけるヒエラルキアの研究史

偽ディオニュシオスのヒエラルキアに関してはロスキーやロックなどのすぐれた研究により、天上の教会のヒエラルキアが連続的な世界観であり、天上では神的知のやり取りがあり、それが教会においては儀式を通じて為されること、ヒエラルキアの各階級は、神の愛によって神に立ち戻ろうとする割合によって定置されていることなどが明らかにされた。本論文では、偽ディオニュシオスのヒエラルキアを、主に神の隠れと現れ、類似・非類似の問題に焦点を当てて考察していく。

第2章 ヒエラルキア思想史的背景

偽ディオニュシオスのヒエラルキアは、新プラトン主義の世界観によるところが大きいと考えられる。そのため、まず偽ディオニュシオスのヒエラルキア論に先立ち、新プラトン主義の世界観を、プロティノスとプロクロスを参考に概観する。プロティノスは、世界を知性界と感性界に分け、感性界を知性界の写しと捉えた。知性界では、一者からの発出によって知性が生じ、知性から魂が生じる。同時に、一者から生じたものは、一者へと向き直り、一者を観ることで自己の存在を確立する。そのため、発出は向き直りを含意する一つの働きである。感性界に存する者は感性界のうちの一者の朧な痕跡を手がかりに、その真の在り処である魂のうちへと戻っていく。プロクロスも同様の世界観をもつが、プロクロスにおいては、知性はさらに存在、知性、生命に三分され、その下位に魂がある。一者、存在、知性、生命はそれぞれ、同じ名を持つ多数の「系列」を有する。たとえば、一者から多くの「単一者」が生じる。偽ディオニュシオスは、こうした新プラトン主義の影響を色濃く受けている。天上と教会のヒエラルキアによる世界の二分化、神的原理からの発出と向き直りの動き、ヒエラルキアの各段階における一者の痕跡などがそうである。

第3章 偽ディオニュシオスのヒエラルキア論

偽ディオニュシオスにおける「ヒエラルキア」の定義、ヒエラルキアの基本構造を確認し、新プラトン主義との類似点や相違点を明らかにする。同時に偽ディオニュシオスにおけるヒエラルキアの特徴、特に、神の隠れと現れや浄化、照明、完成の働きを取り上げる。

偽ディオニュシオスのヒエラルキアとは、可能なかぎり神に似たものとなり、神からの照明に応じて神を模倣すべく上昇するための、秩序、知識、活動である。これは天上、教会共に共通する定義である。

偽ディオニュシオスの世界観は天上と地上のヒエラルキアから成る。天上は、第一と中間と最後の階層であり、夫々の階層に三種の存在者が存する。教会のヒエラルキアには二つの階層があり、夫々が三つの役職や立場から成る。これに三つの儀式が加わる。一であり善である神的原理から多が生じ、両ヒエラルキアを構成する。これにより、神的なものが存在者各段階に分有され、どの段階にも神的原理が現存する。このため、この秩序は「聖なる hiera」「原理 archē」として「ヒエラルキア hierarchia」と呼ばれる。神的なものの分有により、存在者は神に類似し、存在者相互にも類似する。神的原理からの神的知識の照明は各段階の存在者を通じて最下位の存在者にまで達する。また存在者側からもこの照明に応じる仕方です神に向かって上昇していく。

こうした偽ディオニュシオスのヒエラルキアの構造とその働きは、新プラトン主義にその基を見ることができる。他方、相違点もある。偽ディオニュシオスにおける神的原理の発出には内的発出と外的発出がある。前者は神の三位格の区別であり、「産出 theogonia」と呼ばれる。後者は、神の被造物への発出である。偽ディオニュシオスにおける発出は、神の三位格の区分を除けば、神から被造物に向かう発出のみで、創られた存在者が自らよりも下位の、別の存在者を生み出すということはない。この点は新プラトン主義と明確に異なる。また、各層の存在者間の関係もプロクロスのような「系列」をなしているのではない。さらに、偽ディオニュシオスのヒエラルキアには、発出と向き直りのほか、各段階に浄化、照明、完成の働きがある。これは天上においてはこの三つの働きが各段階に現れるが、教会のヒエラルキアにおいては厳密に夫々の働きが割り当てられている。

次に、偽ディオニュシオス的ヒエラルキアの特徴を、神の「隠れ」と「現れ」、また「闇」という語に焦点を当てて考察する。偽ディオニュシオス文書には「隠れた、秘密の kryphios」という語が頻繁に使われており、その用例の多くは神を形容するものである。偽ディオニュシオスにおいて、神は常に秘められており、我々には知りえないものである。神の我々の世界への顕著な現れであるキリストさえも、我々の眼前に現れていると同時に隠されていたと偽ディオニュシオスは考える。神が「隠れ」として表現されるのは、様々の感覚的、知的形象によって神を何ものかとして知ることには限界があり、神は常に我々から隠されているということを教示するためではないかと思われる。

他方で、神秘主義思想を特徴付ける「闇 gnophos, skotos」という言葉は、偽ディオニュシオス文書では「隠れ」に比べて使用例が少ない。偽ディオニュシオスは、ニュッサのグレゴリオスがモーセの神への登攀を描写する上で使用した「闇」をほぼ踏襲した使い方で「闇」という語を使っている。さて、偽ディオニュシオスは何らかの仕方で神を表現し、それらの形象を通して神を知ろうとする試みを肯定神学と呼んでいる。これに対し、我々が知性や感覚で捉えうるどのようなものも神を表すには足りないものとして否定し、神が何であるかよりも何でないかを知っていく試みを否定神学と呼んでいる。否定神学は、神に関するあらゆる肯定を前提とするから、肯定神学と否定神学は両方ではじめて完成されるものであるといえる。しかし、知性的、感覚的な形象のうちに神との類似性を求めて、知性的な名称からより低級なもの、感覚的なものへと裾野を広げていく肯定神学に対し、全く神に類似していないように思われるものから徐々に、一見神に類似しているように思われる象徴や名称を否定しながら神に向かっていく否定神学のほうが明らかに重視されている。否定神学は神への上昇からである。否定神学によって、様々の感覚的、知性的形象のうちに神とは何かを見出すことを否定し尽くした観想者の魂は、終に感覚も知性をも超えた「闇」に入っていく。そこでは、実際に見、知るのではなく、見ること、知ることを超越したところに達する。ところで、「隠れ」もまた、神が何ものでもないことを知るための表現であったから、「隠れ」も「闇」も同じ事態のようにも思われる。しかしそれでも偽ディオニュシオスが「闇」よりも「隠れ」を好んで使ったのは、「闇」さえも否定神学によって克服していかなければならなかったからであり、また、神が隠されていることが我々の神探求を促進するからである。

第2部 偽ディオニュシオス的ヒエラルキアの具体的展開

第2部では、第1部でみた偽ディオニュシオスのヒエラルキアの具体的な構成要素とその働きを詳しくみていく。

第1章 天上のヒエラルキア

天上のヒエラルキアは、被造物の中で最も神に近い、天上の存在者によって構成されている。彼らの世界は一様ではなく、三つの三つ組みによって構成されている。最上位は、セラフィム、ケルビム、王座、中間の階級は主権、力、能力、最後の階級は権勢、大天使、天使からなる。彼ら夫々の役割はその名称から理解される神の諸属性を映し出すことであるが、具体

的な各々の働きの相違は明確ではない。偽ディオニュシオスのヒエラルキア論の特徴である浄化、照明、完成の働きも、各段階にそれら三つの働きがあるというほどの説明のみである。彼らの働きは、神的光明の伝達であり、第一の段階に属する者だけが神から直接照明を受ける。しかし、直接とはいえ、被造物に明らかにされる段階でその照明は既に神の本質とはかけ離れた朧な写しとなっている。第一の階級の者はこの照明を見つめ、神を模倣し、下位に伝えていく。中間以下の階級は、自身よりもすぐ上位にある存在者からの照明を見つめて模倣し、下位に伝える。天上のヒエラルキアの役割は、神が隠れておりながらも、被造物の世界に啓示したことを明らかにし、伝えていくことである。

第2章 教会のヒエラルキア

教会のヒエラルキアは、二つの三つ組みと儀式の三つ組みからなる。ヒエラルキアの基本的な要素は天上のヒエラルキアで凡そ示されている。教会のヒエラルキアはこれを可感的な象徴で肉付けしたものと考えられる。儀式の三つ組みとは、洗礼、聖体、香油のサクラメントであり、夫々、洗礼が浄化、聖体が照明、香油が完成の働きを為す。そしてこれらの儀式を執行する、輔祭、司祭、主教が聖職者の階級をなし、儀式に与る修道士、信徒、清められた人々がいま一つの階級を成す。教会のヒエラルキアでは、浄化、照明、完成の具体的働きと役割分担が明確にされている。教会のヒエラルキアの特徴は、「キリスト」や「イエス」への言及が多いことである。偽ディオニュシオスは、天上のヒエラルキアには天上の存在者に適応する、純粋に知的な儀式が存在すると考えていた。他方、地上にはモーセに与えられた律法の儀式があった。キリストの到来によって、教会の儀式はキリストを中心とし、キリストを模倣するものであるという。天上のヒエラルキアにおいてもその各段階に神的光明の根源が臨在していたが、教会ではこれら儀式のなかに、儀式を執行する者に儀式に与る者に、キリストが現臨していると考えられている。

第3章 神と存在者の類似と非類似

以上のことから、偽ディオニュシオスにおけるヒエラルキアの役割は、存在者にとって知られざる神の現臨と隠れの教示であると考えられる。我々の神への上昇はヒエラルキアを通して示された神の象徴や名称を吟味し観想する、いわゆる肯定神学とそれら象徴を否定しながら進んでいく否定神学によって実現する。『天上位階論』には、神への上昇のための、神や天上の存在者に関する多くの象徴が解釈されている。しかし、諸象徴の中には、「隅石」や「香油」など、一見神や天上の存在者には不適切と感じられるような感覚的な象徴もある。「類似しない類似」という特異な用語を使って、一見ふさわしくない象徴について語られる『天上位階論』第2章は、このテキスト全体の中で、また偽ディオニュシオス文書全体においても重要な意味を持つと考えられる。先に触れた肯定神学と否定神学という偽ディオニュシオスの神探求のための基本的方法論が提示されているためである。神や天上の存在者に似つかわしくない形象が特に主題とされたのは、それが、一見ふさわしい形象表現に比べ、説明を要するものであったからである。偽ディオニュシオスの解釈によれば、こうした似つかわしくない形象は、冒瀆的な者から聖なるものを保護するとともに、神を探求する者の探究心を刺激する。また、「怒り」や「欲求」などの情念の表現は、神や天上の存在者について言われるときには通常の否定的な意味とは異なった意味で解されなくてはならないという。一見ふさわしくない形象は、否定神学の意図において、ふさわしい表現よりも一層重視される。しかし、似つかわしくない表現や否定的表現を通して真に意図されていることは、一見神にふさわしい表現も、ふさわしくない表現もすべては神に似ていて似ていないという二重性であることが次第に明らかになる。先に、ヒエラルキアのどの段階も神的光明のものを分有しているため、どの段階にも神的光明の原理が現臨すると述べた。そのため、どのようなものも存在するかぎり、神に類似している。しかし、他方で、神と被造物の間には隔絶があり、どのようなものも決して神には類似していない。非類似の類似は、我々の神探求において、この二重性が意識されなくてはならないことに気付かせるのである。

結び

偽ディオニュシオスは、神は万物に現存するが、万物が神に現存するのではなく、我々が神と合一するために清浄な祈りをもって神を呼び求めるとき初めて神に現存する者となる、と述べる。確かに神はヒエラルキアの各段階のどこにも現存する。しかし、神は多種多様なものの内に隠れている。一見神に類似しないように思われるもののうちにも隠れている。そのため、我々は一見ふさわしくないもののうちに隠れている神に気付いていかなければならない。しかし、同時に神を何ものかとして規定することに安住することなく、神の呼び戻しの力に信頼して神探求を続けなくてはならないのである。

論文審査の結果の要旨

神的なものは否定を通してしか知られえないとする否定神学の源流をなす偽ディオニュシオス・アレオパギテースの思想は、地下水の如くヨーロッパの神秘主義思想を活気づけてきた。またトマス・アクィナスやニコラウス・クザーヌスへの影響はよく知られ、解釈の積み重ねも厚いものがある。十九世紀後半からの研究において、プロクロスの著作の一部との酷似が見いだされ、今日ではこれらの文書が使徒言行録十七章三十四節に記された人物とは異なることが明らかとなっている。その故に「偽」が冠せられて呼ばれるこのディオニュシオスは、天上と地上のヒエラルキア（位階）について論じた二つの書を著している。『神名論』と並ぶ偽ディオニュシオスの主要著作であるこれらの書は新プラトン主義の世界観に色濃く影響されており、そうした観点から研究もなされてきた。論者もこの観点をひきつぎ、ヒエラルキア論が天上と地上を含めたコスモスの単なる構造の探求ではなく、本質的に魂の上昇と神化に寄与するためのいわば階梯としてのヒエラルキアについて論じたものであるという洞察に導かれて、二つのヒエラルキアについての偽ディオニュシオスの叙述を再検討している。そのようにしてなされたこの論文の成果を挙げれば次のようである。

I ヒエラルキアという言葉は偽ディオニュシオスの著作の多くに見出され、それ以前の用例が見られないことから、恐らく偽ディオニュシオスの造語になると思われるが、この言葉は通常用語法では、階層の権力的上下関係を表すのに用いられてきている。研究者も多くは、司令するものとされるものとの統治や管理の関係を示すものとしてきた。しかし論者はテキストの詳細な分析を通して、この語が、聖なる根源という語源的意味を強く保持し、格差のあるそれぞれの階層に、なお同じ聖なる根源が現臨していることをこの言葉を通して偽ディオニュシオスが示そうとしていたことを証示している。このことを最も説得的に示しているのは、神の「隠れ」について論じているところである。神秘主義的伝統、殊にアレクサンドリアのフィロンやニュッサのグレゴリオスにおいて強調される光を超えた「闇」という表現は偽ディオニュシオスにも見出されるが、それほど頻出してはいない。むしろ神の「隠れ」と言う表現が強調されている。論者はこのことから偽ディオニュシオスにおいては、「闇」という概念の内にも神を閉じ込めないで、この闇をも否定し、超え出て神を求めようとする志向があったのではないかと解釈する。しかも神の隠れとは、神との神秘的一致の状態を表すとは限らず、偽ディオニュシオスにおいて、神は我々に常に現前しつつ隠れており、隠されたものとして現れていると理解されていると主張する。ヒエラルキアとは、それぞれの存在の多様な差異性において、なお隠されたものとして現前する、聖なる根源に与る道であることを論者は説得的に提示した。

II 上に述べたヒエラルキア理解、つまりいたるところに現前する隠れた神に与る道としての理解から、論者は、これまであまり注目されてこなかった「類似しない類似」という表現に注目し、彼の否定神学的思想の核心ともいえるものが、ヒエラルキア論においてこの表現で具体化され、彼のヒエラルキア論のいわば方法論にもなっていることを明らかにしている。偽ディオニュシオスは我々の知りうるすべてのものを神が越えていることを表すために、しばしば神を超・存在的、超・善的、超・理性的などと言う。その意味では神は何ものにも類似していないことになる。しかし彼が言おうとするのはそれだけに尽きない。彼はこの類似していないという否定において、或る種の神の真近さに触れているのである。神が我々の理性によっては捉えられないことに気づくことは、神が我々の理性を超えた「非理性」と呼ばれるものであることを理解してゆくことである。「類似しない類似」という表現は、神の本性が隠れにあり、似ていないことにおいて似ていることを示している。神に向かって上昇して行くことは、神とこの世界との類似性に気づく過程であると共に、我々が神とは似ても似つかないということを見出す過程でもあり、しかも似ていないということにおいて不可解な神との類似、現臨に触れるのである。「類似しない類似」とはこのような神との撞着を暗示するものであり、この表現は、魂の神への上昇、神化の過程を叙述することを目指す偽ディオニュシオスのヒエラルキア論の主要テーマを表すものであると論者は主張し、これまであまり注意されてこなかったこの表現の深い意義を明らかにした点はこの論文の大きな成果である。

III 論者は、上述のディオニュシオスのヒエラルキア論に見られる神的根源のあらゆる階層への現前、および「類似しない類似」という考えが、単なる肯定神学でもなく、また単なる否定に安住する神学であることも許さない徹底的な超越の思想であることを確認する。最も神に似ていないもののうちにも、「何ものにも似ていない」という神の本性の写しを見、「創られた全ては善し」との善なる神の「遠きこだま」を偽ディオニュシオスが聞き取っていることに再三論者は注意を促す。こ

のような偽ディオニュシオスのうちに論者は、新プラトン主義的に創造思想を解釈、展開したキリスト教思想家の一典型を見ている。

以上のように本論文は偽ディオニュシオスのヒエラルキア論について新しい視点から論じたものであるが、新しい知見をもたらすための手探りに拠ると見られる表現の不統一が散見される。例えば一見神に類似すると見られる表象が「適切な表象」、また一見類似しないと見られる表象が「不適切表象」と単純に表現されるなどである。しかしこれは論者がここで得られた洞察を一層吟味彫琢する中で正されうもので、本論文の価値を著しく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十年二月二十日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。